

北海道型クアオルト 形成に向けた国民保養 温泉地の空間構造 分析



上田 裕文 (うえだ ひろふみ)

札幌市立大学デザイン学部空間デザインコース講師

1978年北海道留萌市生まれ。東京大学農学部森林環境科学専修卒業、東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻修了。その後、ドイツ学術交流会(DAAD)奨学生としてカッセル大学建築・都市計画・景観計画学部都市・地域社会学科に留学。2009年に経済社会科学博士(Dr.rer.pol.)取得。札幌市立大学デザイン学部空間デザインコース助手、助教を経て12年から講師。著書に『The Image of the Forest』(Suedwestdeutscher Verlag für Hochschulschriften 2010年)。

はじめに

北海道の温泉地の空間的な特性を、その周囲の森林や農村景観といった自然資源と一体的に調査分析し、クアオルト(滞在型の健康保養地)形成のための課題点を導き出すことが本研究の目的である。

北海道では依然、ドライブ観光を中心とした点と点を結ぶ周遊型・通過型観光が中心である。近年ではヘルスツーリズムへの注目も高まっているが、森林をはじめとする自然資源を人間の歩ける範囲で組み合わせた滞在型の健康保養地としての地域空間づくりはまだ一部で始まったばかりである。このような健康保養地の考えは、ドイツで古くから取り組まれているクアオルトの考えに共通する。クア(Kur)は「療養・保養」、オルト(Ort)は「地域・地区」の意味で、クアオルトとは「療養地・保養地」という意味である。日本においては、大分県の湯布院(現在の由布市)が「クアオルト構想」に基づいたまちづくりを行い、現在では先進温泉観光地として広く知られている。北海道は本来、そのヨーロッパ的な気候や美しい自然、農村景観の牧歌的イメージから、クアオルト形成に最適の条件をそろえていると考えられる。

そこで本研究では、本来、保養地形成を目的に国に指定された、国民保養温泉地を対象に空間特性を把握し、地域振興を目指したクアオルト形成の空間的ポテンシャルを分析する。

1 クアオルトと国民保養温泉地

ドイツのクアオルトは、法律の規定により厳しい品質の基準を備えた、医療と密接に関わる高品質な長期滞在型の地域をいう。自然の治療薬を活用する病院や治療の施設があり、医療保険が適用されるほか、大きな保養公園や人が交流する施設、景観形成や環境保護など様々な条件が認定基準となっている。小関(2012)によると、ドイツのクアオルトの数は2007年現在374カ所で、自治体数12,315の約3%を占める。20世紀末から、医療費の抑制が強化され、現在は療養者が2割

以下となり、実質上「療養地」から自費での保養を中心とする「健康保養地」に転換している。

一方、日本にも古くから湯治文化があり、多くの温泉地域が発展してきた。その中でも、特に温泉利用の効果が十分期待され、かつ健全な温泉地として優れた条件を備えている地域は、昭和29年から厚生省（現在は環境省が担当している）の「国民保養温泉地」として指定されてきた。現在では、全国に91カ所が指定されている。しかし、大衆型のマストツーリズムが最盛期を迎える中で、国民保養温泉地はほとんど人々に意識されることはなくなった。近年では、小規模で「癒し」を求めた保養プログラムや、療養を目的としたヘルスツーリズムが注目されている。つまり、日本においては、これまでの享楽型の保養地から、療養型への移行が一部で見られ、国民保養温泉地が見直される時期にあると考えられる。

ドイツのクアオルトと日本の国民保養温泉地の条件を表1のように比較してみると、多くの共通点が見られる。特に、温泉施設と保養・医療施設がその地域特有の環境や景観と一体となって活用される点が、長期滞在型の健康保養地に求められることが分かる。

この点に着目して、北海道に15カ所指定されている国民保養温泉地を対象に、その空間のポテンシャルを調べることで、今後の北海道型「クアオルト」形成にむけたデータ、課題点などを得ることが可能であると考えた。

2 研究方法

本研究では、北海道にある国民保養温泉地を対象に、文献調査、空間構造調査、関係者に対するヒアリング調査の3つの手法を用いた。文献調査により対象地の選定と現地調査の準備を行い、対象地の概要等を把握した。空間的特徴に関する現地調査では、空間の「構造」に着目した調査を行った。ドイツのクアオルトの空間的ゾーニングでは、①中心市街地ゾーン、②医療施設などから構成される療養ゾーン、③療養患者や観光客の宿泊ゾーン、④クアパークと呼ばれる公園、⑤文化的な催し物や社交施設が全て徒歩圏内に集積していて、また、その周囲には⑥遊歩道が張り巡らされ、周囲の環境要素を上手く結びつけた形で長期滞在型の保養地を形成している。

ケビン・リンチは空間の要素を5つのエレメント（パス・エッジ・ノード・ディストリクト・ランドマーク）で表した。それを参考に、クアオルトにおいては、各施設（ノード）がその周囲を取り巻く自然環境（エッジ）によってどのような領域（ディストリクト）を形成し、またそれらが歩行者通路（パス）によってどのように結ばれているかによって、実際の健康保養の活用のポテンシャルを構造化することが可能であると考えた。

さらに、現地の空間的特徴に合わせて、温泉地関係者（温泉・宿泊施設経営者、地域住民、観光協会等）に対してヒアリング調査を行った。主に温泉地全体で

表1 「クアオルト」と「国民保養温泉地」の条件

クアオルト（引用：上山市クアオルト協議会HP）	国民保養温泉地（引用：環境省HP）
その土地に特有な治療素材と治療手段がある。	環境衛生的条件が良好であること。
気候条件や景色が良い。	付随一体の景観が佳良であること。
目的に沿った適切な保養・療養施設がある。	温泉気候学的に休養地として適していること。
治療効果が医学的に証明されている。	適切な医療施設及び休養施設を有するか、又は将来設立し得ること。
工場や都市公害による汚染がない。	医学的立場から適正な温泉利用、健康管理についての指導を行う顧問医が設置されていること。
騒音と交通公害から隔離されている。	災害に対し安全であること。
衛生上の配慮が十分にされている。	
専門の温泉気候療法医が常任している。	
訓練された有資格者の専門療法医がいる。	

のヘルスツーリズムに関する取り組みの現状や、客層、医療施設と関係などの温泉地側の認識する温泉地の状況を把握するためである。実際の利用状況と空間構造との関係性から、今後の国民保養温泉地の課題点を考察した。

3 空間構造の分類

北海道の国民保養温泉地に指定されている15カ所のうち、12カ所を現地調査の対象地とした。3段階で2種類ずつに区分し、AタイプからHタイプの計8タイプを想定した上で、実際の対象地の空間構造を分類した。

まず、「町一体型－独立型」を、市街地と温泉施設の境界、距離、領域性の面から分類した。対象地が市街地と一体となって「日常生活の中での健康づくり」を可能にするか（町一体型）、「非日常的体験での保養」か（独立型）を最初に分類した。市街地との一体的な計画は、その温泉地と市街地の「境界」「領域」が重要な要素であると考えられる。そのため、温泉地域を規定すると考えられる、標高の高い山、トンネル、河川などを境界要素と見なし、物理的距離を加えて区分の基準とした。

次に、「集合体－複合体」を、周囲の景観や環境要素と施設等の連続性から分類した。温泉地として計画された施設や道路などの要素が脈略を持った複合体であるか、または単に要素の集合体であるかを区分する。特に「パス（フットパス、ウォーキングコースなどの歩行者通路）」によって施設や環境要素が繋がっているかに着目し、ツアー等の滞在プログラムにおける要素間の関連づけを確認した。

最後に、「場所性－均質性」を、保養空間がその土地の地形や自然条件を活用しているかで分類した。施

設を中心に展開される保養プログラムや滞在中のレクリエーション活動が、その土地ならではの景観や環境要素を活かしているかどうかで区分した。エドワード・レルフ（1991）は、近代的な、土地に関わらない不変的な空間を「均質空間」と呼ぶ。観光の分野においても同様に、マスツーリズムに見られる大衆的（均質的）な観光の形態では、土地の環境条件とは無関係に施設内のみで活動が完結してしまうことがある。クアオルトのような、滞在型の健康保養地では、地域の自然資源を利用した着地型観光や環境整備が求められる。そこで、温泉地域の場所性と均質性を分類基準に加えた。

以上の分類の流れから、各温泉地は表2のように5つのタイプに分類することができた。

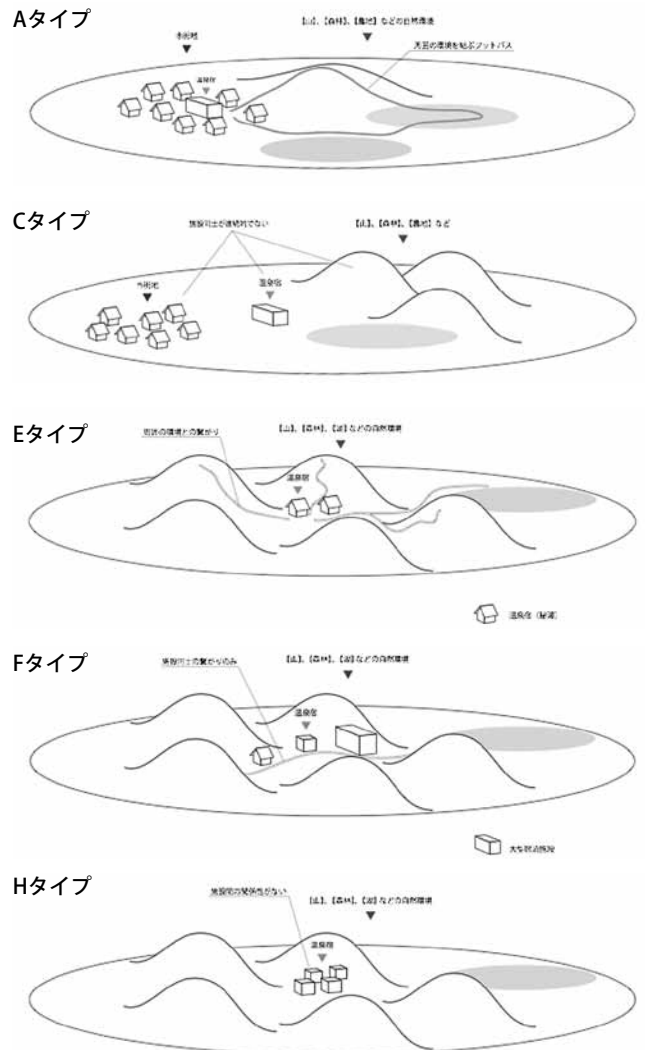


図 各タイプの空間構造モデル

表2 空間構造の分類結果

	分類	温泉郷名
Aタイプ	町一体型、複合的、場所性	洞爺・陽だまり
Cタイプ	町一体型、集散的、場所性	恵山、ながめま、幕別
Eタイプ	独立型、複合的、場所性	十勝岳、ニセコ、雌阿寒
Fタイプ	独立型、複合的、均質性	北湯沢、盃
Hタイプ	独立型、集散的、均質性	芦別、カルルス、豊富

(1) Aタイプ (町一体型、複合的、場所性)

このタイプに分類されたのは「洞爺・陽だまり」のみであった。この空間タイプは、市街地に位置し、周囲を森林、湖、農地に囲まれ、それらを見下ろせる視点場が存在することが特徴であった。取り組みとしては整備中であるフットパスを利用した健康ウォーキングを推進し、洞爺温泉をはじめとした洞爺湖全体においてヘルスツーリズムの動きを見せている。このように全体的に見て空間の完成度の高い保養地であるが、一方で地域住民の健康づくりとしての取り組みに対する意識はまだ薄い。クアオルトが地域密着型の保養地であることから、今後は地域住民を中心とした温泉地の在り方が検討される必要があるだろう。また、医療施設があることから、それらとの連携した取り組みをまち全体で図っていくことが求められる。

(2) Cタイプ (町一体型、集散的、場所性)

このタイプは「恵山」、「ながぬま」、「幕別」が分類された。この空間タイプは、市街地が徒歩圏内であり、周囲を農地、河川、森林に囲まれ、各施設がつながりを持っていないことが特徴であった。取り組みとしては、町民の送迎を行うバスの運行を行っている程度で、特に目立ったものはない。今後、地域に密着した保養地となるために、住民の利用促進と同時に町民交流などの多面的な機能を持たせた温泉施設を中心とした、健康促進の場の形成が課題であると考えられる。温泉施設から周囲の環境を連続的なものにするルートは潜在する。今後は市街地や農地などを眺める視点場、微地形などを利用した遊歩道の計画が期待される。

(3) Eタイプ (独立型、複合的、場所性)

このタイプは「十勝岳」、「ニセコ」、「雌阿寒」が分類された。この空間タイプは、市街地から遠く離れた山奥に位置し、周囲を山、森林などの自然資源に囲まれている。宿泊施設の多くは「秘湯」と呼ばれ、少人数の観光客を対象としている。その徒歩圏内には登山道やスキー場、散策路などのアクティビティの場が全体的に連続した空間を構成しており、それらを目的と

する観光客がほとんどである。周囲の自然環境とそれらに興味関心のある観光客によって現在の「秘湯」としての環境が保たれているため、今後も宿泊施設の大型化や大衆化を避け、土地固有の多様なアクティビティをより深めることが期待される。

(4) Fタイプ (独立型、複合的、均質性)

このタイプは「北湯沢^{※1}」、「盃^{※2}」が分類された。この空間タイプは、Eタイプと同じように市街地から離れた山奥に、周囲を山、森林に囲まれている。また、施設間も「パス」によってつながれ連続的な空間となっているが、その地形条件による領域の限定性から、周囲の森林、山を活用したプログラムが発展していない。これには、大型宿泊施設の存在や、観光形態の大衆化なども一要因となっている。北湯沢ではサイクリングロードやウォーキング施設、足湯を利用した体験空間を整備しヘルスツーリズムの取り組みが始まっている。盃でも、海辺や山裾のキャンプ場が整備されている。しかし、実際には空間が人工的に整備されているため、周囲の自然要素を楽しめるアクティビティに乏しい現状がある。今後は、地域の自然環境を生かした空間計画と環境整備が求められる。

(5) Hタイプ (独立型、集散的、均質性)

このタイプは「芦別」、「カルルス^{※3}」、「豊富」が分類された。このタイプは、市街地から少し離れ、周囲を森林などの豊かな自然環境に囲まれているが、宿泊施設やその他施設との空間的連続性がない点の特徴である。このような温泉地は以前から湯治客が多く訪れてきた地域でもある。ヒアリング調査を通じて、古くからの湯治のスタイルが、一日のほとんどを宿泊施設内で過ごすものであることが分かった。そのため、周囲の自然環境を利用する空間整備が想定されていなかった。近年は、古くからの湯治スタイルからリフレッシュや癒しを求めて訪れる客も増えており、温泉宿泊施設の充実のみでなく、周囲の環境を活かして散歩や散策ができる、領域としての計画が求められる。

※1 北湯沢
伊達市大滝区の長流沿いにある温泉。

※2 盃
積丹半島の泊村にある温泉。

※3 カルルス
登別市にある温泉。登別カルルス温泉とも言われる。

おわりに

以上のように、5つの空間タイプでそれぞれの特徴が見られた。北海道型クアオルトの形成には、周囲の自然環境を活用するため、各施設、自然資源間の「パス」の存在が大きいことが分かった。ドイツのクアオルトのように、市街地に隣接し、さまざまな文化施設や公園と結びついた「町一体型」の温泉地は、北海道の国民保養温泉地には多く見られなかった。地域住民と一体となった、健康づくりやまちづくりとしてのクアオルト形成は、北海道には必ずしもなじまないかもしれない。また、自然の中に立地する「独立型」の温泉地に関しても、大型観光施設などが周囲の環境との連続性を断ち切っている例が見られ、また、「秘湯」として知られる古くからの湯治宿も閉鎖的な空間として存続してきたことが明らかになった。これらも、現在の癒しやリフレッシュを求める観光客のニーズに応じて、周囲の自然環境を活用するための空間整備が求められている。その際に、散策や自然体験アクティビティを提供するパスの整備はますます重要になると考えられる。

このように元々温泉地としてのポテンシャルの高さから指定された国民保養温泉地が、今後期待される滞在型の健康保養地に発展するためのデータの整理、課題点の抽出ができた。北海道型クアオルト形成を目指し、各種施設と自然環境などの関係性から空間構造を把握し、現在のヘルスツーリズムなどの取り組みと対応させて整理を行った。今後は具体的計画に向けたより多面的な考察が必要とされる。今後の研究課題としたい。

引用・参考文献

- 小関信行、アンゲラ・シュー（2009）：『クアオルト入門、気候療法・気候性地形療法入門～ドイツから学ぶ温泉地再生のまちづくり～』（書肆犀）
- 国民保養温泉地協議会（2008）：「国民保養温泉地ガイド」（日本温泉協会）
- 日本温泉協会（2003）：平成16年度国民保養温泉地における温泉利用に関する検討調査
- 日本温泉協会（2004）：平成17年度国民保養温泉地における温泉利用に関する検討調査
- 日本温泉協会（2005）：平成18年度国民保養温泉地における温泉利用に関する検討調査
- ケビン・リンチ 丹下健三 富田玲子訳（1960）：『都市のイメージ』（岩波書店）
- エドワード・レルフ 高野岳彦 阿部隆 石山美也子訳（1991）：『場所の現象学』（筑摩書房）